

* 東日本大震災支援活動報告

2011年4月～2013年7月



2013年夏：北海道で気球に乗る福島の子ども達

一般財団法人 世界こども財団 (FGC)

本気で動く個人のネットワークが本当に必要な支援を可能にする

世界こども財団(FGC) 医療支援班 上 昌広

(東京大学医科学研究所 先端医療社会コミュニケーション社会連携研究部門特任教授)

私は内科医です。ご縁があり、東日本大震災以降、福島での医療支援を続けています。具体的には、地域住民の健康診断、内部被曝検査、最近では多数の若い医師たちが常勤医として、福島で勤務することを手伝っています。



実は、私たちが、このような活動を続けていられるのは、世界こども財団のお力添えがあつてのことです。土屋了介理事長、宮澤保夫先生をはじめ、関係者の方々に感謝申し上げます。

教育環境支援班の方々には、本当に御世話になりました。例えば、震災直後に南相馬に入った我々のチームの宿舎や食事の手配、移動手段のサポートなど、一切合切をやっていただきました。

殆どの住民が避難し、真っ暗闇の南相馬市で、唯一営業を続けていた旅館を借り切り、星槎グループがどこからともなく食料を調達し、食事を準備していただいたことは、今となっては、いい思い出です。

また、2011年5月末、全村避難を控えた飯館村を手始めに、相馬市玉野地区、川内村などで、住民の健診を行いました。相馬市については、今年の7月に震災三年目の健診を行ったばかりです。

一連の健診では、会場の設営や受診者への案内を引き受けて頂いたのは、教育環境支援班の方々でした。市役所の方々は勿論、全国から集まった医師たちにとっても、どれだけ心強かったかはわかりません。知人の医師は、「彼らの真摯な姿をみて、価値観が変わった」というくらいです。

さらに、教育環境支援班の方々は、相馬市の「さくらビル」に活動の拠点を作り、支援に入る方々に宿舎や食事を提供頂いています。この施設は「星槎寮」と呼ばれ、朝日新聞の『プロメテウスの罫』でも大きく取り上げられました。

震災直後、支援者にとっての悩みは、宿舎が確保出来ないことでした。私たちは星槎グループが運営する星槎寮のお陰で、このような問題を回避することができました。

「星槎寮」に吸い寄せられるように、多くの方々が繰り返し訪れるようになりました。例えば、地元 相馬高校の教師である高村泰広先生（現在は隣町の新地高校に異動）も、その一人です。凄まじい行動力を有する教育者です。早速、友人の教師や教え子達を連れてきてくれました。その中に松村茂郎・相馬高校教諭や、当時大学生だった藤原真哉さんがいます。私たちも、星槎寮で彼らと知り合いました。

松村先生は相馬高校の教育レベルの向上に大きく貢献し、教え子が13年ぶりに東京大学に現役で合格しました。また、藤原さんは大学を卒業後、川内村の音楽教師として、被災地の子どもの教育に従事しています。私たちも、彼らの活動を応援し、このような活動を通じ、多くを学ぶことが出来ました。

人材こそ、地域の財産です。被災地の復興に関しては、教育から始まると言っても過言ではありません。これからも教育環境支援班と連携をとりながら活動を続けてまいります。

子どもを支える教員のネットワークづくりのために

世界子ども財団 (FGC) 教育環境支援班 吉田 克彦

(相馬フォロアーチーム・星槎大学非常勤講師)

教育環境支援班では、主に福島県の相双地区（相馬市・南相馬市・新地町）の小中学校及び、高校へ週1～2回スクールカウンセラー（SC）が訪問し、カウンセリングや学習支援を行っております。

今回は養護教諭サポート事業について紹介します。

養護教諭とは保健室の先生です。養護教諭の仕事は、子ども達の健康観察や怪我や病気の処置だけではありません。食育や性教育をはじめとした健康教育に関する啓発活動、教室の明るさを確保する照度検査、空気や水質の環境管理も行わなければなりません。特に、福島第一原発事故以来、放射線教育の強化や放射線に関する健康管理・検査の推進も重要な業務です。このように、被災地の子ども達の心身の健康を維持するためには養護教諭の力が欠かせません。しかし、相双地区は避難による児童生徒数減少で、養護教諭は学校に一人しか配置されていないため、職場で先輩から教わることができません。新人であってもベテランと同じ仕事をしなければなりません。高い専門性が求められ、一人職であり、子どもの健康安全に直結する存在です。養護教諭の方をサポートすることは、養護教諭自身の燃え尽き防止と、被災地の子ども達の心身の健康を増進するためには欠かせないことです。



FGCでは、養護教諭の専門性をさらに高め、養護教諭同士の連携・連帯を深めてもらうことを目的として勉強会を主催しています。



養護教諭勉強会の様子

具体的には、個別対応と研修会・事例検討会の開催です。個別対応では養護教諭が対応に苦慮する場面で、現地に常駐しているSCが必要に応じて支援・助言・情報提供などを行っています。事例検討会は二週間に一度、平日の夜に7～8名の先生方が集まり、22時過ぎまで熱心に学び、実際に困っている事例を紹介し、養護教諭の方々にFGCのSCが加わり議論しています。時には、特定の事例を設定せず、とりとめのない日常業務についての話しをする中で、それぞれの学校の様子や地域の状況・他校の先生方の仕事ぶりを知

ることができる場ともなっています。この夏には、発達障がいやカウンセリング技法の研修会も行いました。

このように養護教諭の方々の緊密なネットワークを形成することによって、地域の子ども達の健全な育成を面で支える一助になればと考えております。

* 東日本大震災支援活動 総集計



健康診断で骨密度を計測する星槎スタッフ

【医療支援班】 《2011年5月～2013年7月》

《医療支援班・教育環境支援班が実施した放射線説明会・健康診断》

放射線説明会	一般市民	教職員対象説明会	中学生	医療関係	合計	健康診断
						(仮設住宅等住民等)
相馬市	2,494	240	約200		2,934	2,403
南相馬市	186	113		60	359	
川内村	78				78	135
郡山市	25				25	
飯館村						424
総合計	2,783	353	約200	60	3,396	2,962

【教育環境支援班】 《2011年5月～2013年7月》

相馬フォロアー チームとして	カウンセリング			コンサル セッション	行動 観察	情報 交換	特別支援・ 心理教育研 修	授業 サポート
	生徒	教員	保護者					
中村第二中学校	55	93	22	15	14	33		
磯部 中学校	212	99	1	94	161	81		31 クラス
磯部 小学校	187	58	1	4	30	2	5回	16 クラス
日立木 小学校	42	26	4	33	131	84		
玉野 小学校	1	1	0	0	0	0		
山上 小学校	1	2	2	4	50	44		
新地 高校	3	0	1	4	0	3		
原町第三中学校	92	3	11	3	11	23		
小高 中学校	118	8	7	41	108	72	1回	
小高 小学校	78	27	11	47	85	66		
鳩原・金房・福浦小	42	37	4	70	113	71		
真野 小学校	5	2	4	26	49	25		
合計	836	356	68	341	752	504	6回	47 クラス

相馬市

新地町

以下南相馬市
緊急カウンセラー派
遣等事業

《活動の効果（各校のアンケート結果より）》

- ・ 専門的見地からこどもの心理的成長や人間関係など、具体的なアドバイスが教育現場に生かされた。
- ・ 教職員にとってはいつでも相談できる安心感（一人で抱え込まずにすむ）とカウンセリング等によって得た情報を共有し、多面的に子どもを捉え、学習不振・問題行動・不登校・発達障がい等に積極的アプローチができ教育的効果が高まった。
- ・ 心理検査結果の解釈や保護者への伝え方について専門的な視点でのアドバイスが有効であった。

星槎寮（相馬市：さくらビル）における震災支援活動の後方支援

星槎グループは、福島県相馬市内のビル（星槎寮）を支援者の無料宿泊施設として確保することで、継続できる支援を実現しました。相双地区の市民の皆様が、心身ともに健康で生活が送れるよう医療・教育の両面の活動支援される方々の宿泊・食事等の後方支援を行い情報交換の場所となっています。

以下は、2011年4月より2013年まで、星槎寮（相馬市）を支援の活動の拠点として利用した団体の活動効果をまとめています。

尚、星槎寮の活動は、2013年3月21日・22日の朝日新聞朝刊「プロメテウスの罫」に取り上げられました。



2013年7月相馬健康診断の様子

*星槎寮 宿泊集計【2011年4月～2013年8月】

	2011年度				2012年度				2013年度			
	星槎	東大医 科研	ボランティア	合計	星槎	東大医 科研	ボランティア	合計	星槎	東大医 科研	ボランティア	合計
4月	144	37	13	194	34	22	35	91	32	12	17	61
5月					44	8	5	57	41	13	25	79
6月	84	19	11	114	36	12	17	65	44	9	25	78
7月	53	18	28	99	65	63	44	172	100	68	32	200
8月	49	24	27	100	29	25	38	92	19	6	77	102
9月	51	44	5	100	41	22	30	93				
10月	47	11	6	64	55	8	39	102				
11月	32	10	7	49	41	16	18	75				
12月	21	13	9	43	25	32	38	95				
1月	17	15	0	32	27	34	15	76				
2月	44	17	3	64	51	12	22	85				
3月	24	15	81	120	32	6	13	51				
合計	566	223	190	979	480	260	314	1,054	236	108	176	520

累計 のべ宿泊人数：2,553名【星槎グループ：1,282名、東大医科研関係者：591名、ボランティア：680名】

1. 星槎寮を活用した方々の活動効果


《2011年度》

【健康診断・相談会】医師へのサポート	相馬市仮設住宅と相馬市八幡・山上・玉野地区の相談会を実施。高めの放射線量が計測されている玉野地区では、全住民を対象として実施。東京大学医科学研究所上昌広特任教授をはじめとした医師団と地元医師らが診察にあたる。 次年度以降も継続
--------------------	---

<p>【放射線説明会】 講演者へのサポート</p>	<p>2011年度は16回実施（2,412名が出席）相馬市内で5月より東京大学医科学研究所の医師（坪倉正治氏など）を講師に迎え、各地区にて開催。6/6日立木地区は、約250人が出席（住民に加え、浜北聴覚障害者会の聴覚障害者8人が出席。）</p>
<p>【学習支援】 実施者へのサポート</p>	<p>相馬高校への学習支援として、震災直後より、代々木ゼミナールの藤井健志氏、東京大学経済学部松井彰彦教授及び、松井ゼミの方々が定期的に相馬を訪問。これをきっかけとし、代々木ゼミナールの安藤勝美氏・駿台予備学校の鳥光宏氏・犬塚壮志氏が相馬高校への学習支援を実施。</p> <p style="text-align: right;">次年度以降も継続</p>
<p>【子どものメンタルケア】 カウンセラーへのサポート</p>	<p>相馬市内では津波被害を受けた小中学校・南相馬市小高地区（警戒区域）の小中学校へメンタルサポート及び生徒指導サポートを実施。</p> <p style="text-align: right;">次年度以降も継続</p>
<p>【奥寺康彦サッカー教室】 運営スタッフへのサポート</p>	<div style="display: flex; align-items: center;">  <div style="margin-left: 10px;"> <p>星槎グループ奥寺スポーツアカデミー（OSA）校長・元サッカー日本代表・奥寺康彦氏のサッカー教室や指導者講習会を大磯・相馬市で実施。小中学生の神奈川遠征交流試合などのサッカーを通じた支援を行う。</p> <p style="text-align: right;">次年度以降も継続</p> </div> </div> <p style="margin-left: 20px; font-size: small;">大磯にて交流</p>
<p>【ヘドロやがれきの撤去・除去に携わる作業員及び住民の健康対策講演会】 講師への支援</p>	<p>東日本大震災で発生した瓦礫から飛び散った粉塵による健康被害が懸念されていることを受け、6月相馬市コミュニティセンターで講演会を開催（講師：東京大学大学院医学系研究科の渋谷健司教授）。ヘドロや瓦礫の撤去にあたる作業員や流木切断作業員、被災地の行政区長など約120人が出席。</p>
<p>【相馬市復興会議顧問会議】 参加者への支援</p>	<p>相馬市の復興計画策定に向け、有識者からの助言・指導を受ける。</p> <p>▽北川正恭（早稲田大学大学院教授、元三重県知事）▽大澤貫寿（東京農業大学学長）▽大石久和（財団法人国土技術研究センター理事長、元国土交通省技監）▽牧野治郎（社団法人日本損害保険協会副会長、元国税庁長官）▽上昌広（東京大学医科学研究所特任教授）▽新浪剛史（株式会社ローソン代表取締役社長）▽長有紀枝（立教大学大学院教授、NPO法人難民を助ける会理事長）</p>
<p>【相馬市健康対策専門部会】 委員へのサポート</p>	<p>東京電力福島第一原子力発電所事故で放出された放射性物質から、市民の健康を守る対策を協議する相馬市健康対策専門部会の委員として、東京大学大学院理学系研究科の早野龍五教授、同大学医科学研究所の上昌広特任教授、同研究所の坪倉正治医師の3名が加わる。幼児、小・中学生及び妊婦のガラスバッチによる積算線量の測定結果を踏まえた今後の対策などについて協議。</p>
<p>【被災地を訪れる支援者】 専門家・ボランティア等への支援</p>	<p>被災地を訪れる専門家・ボランティアへの宿泊等の支援。</p> <p style="text-align: right;">次年度以降も継続</p>

<p>【スペースウェザー協会】 放射線量計設置スタッフ サポート</p>	 <p>作業する星槎グループ スペースウェザー協会の職員</p>	<p>福島県双葉郡浪江町との協同により、放射線量計（9台）を設置（浪江町の希望場所）。生活空間に近い場所での放射線量測定データをリアルタイムにインターネット上に配信。避難している住民の方々にも実情報を伝え、住民が今後の生活計画を立てるデータとして活用できるよう活動している。 次年度以降も継続</p>
--	---	---

《2012 年度》

<p>【ブータン留学生被災地訪問】 留学生・スタッフへのサポート</p>	<p>ブータン王国にある大学、RTC（Royal Thimphu College）の学生らが2012年2月、相馬市役所を訪問、立谷市長から震災後の対応や復興状況等について説明を受ける。星槎大学や星槎国際高等学校など星槎グループ各校とRTCの学生との交換留学プログラムの一環としての被災地を訪問。</p> <p style="text-align: center;">次年度以降も継続</p>	 <p>RTC 留学生相馬市訪問</p>
<p>【ピアノリサイタル開催】 ピアニストへのサポート</p>	<p>3月・10月の2回。パノス・カラン氏による東日本大震災復興支援ピアノリサイタル。</p>	
<p>【仮設住宅での健康マッサージ】 支援者へのサポート</p>	<p>神奈川県伊勢原市にある国際総合健康専門学校の学生13名と引率教員1名が、仮設住宅の住民に対して、2週間、指圧・整体施術を342名に実施。「歩けるようになった」、「よく眠れた」、「肩が上がるようになった」と評価を受けた。</p>	
<p>【リアルタイム線量計設置の部会】 委員へのサポート</p>	<p>相馬市健康対策専門部会委員である東京大学早野龍五教授が発案した「リアルタイム線量計」の設置部会委員へのサポート。</p>	
<p>【寺子屋事業】 学習ボランティアへのサポート</p>	<p>仮設住宅の小中学生を対象とした「寺子屋事業」は2012年6月から、東京大学の学生ボランティアによる学習支援活動。月2回程度、土・日曜日に相馬市内5ヵ所仮設住宅等の集会所で実施。（1集会所あたり2人の講師）</p> <p style="text-align: right;">次年度以降も継続</p>	
<p>【アスリートソサエティの被災地支援プロジェクト】 主催者へのサポート</p>	<p>6月相馬市内において、トップアスリートによる陸上教室が開催された。アスリート選手の団体「アスリートソサエティ」（代表：為末大[陸上]、理事：長塚智広[競輪]）の被災地支援プロジェクト。教室に参加したアスリートは、長塚智広、横田真人、秋本真吾、菅野優太、寺田克也、細野史晃の各選手7名。</p> <p style="text-align: right;">次年度以降も継続</p>	

【中学生のための放射線講演会】講師へのサポート	放射線の影響や身を守る方法の理解を深めるため、東京大学医科学研究所の坪倉正治氏を講師に相馬市内中学校へ放射線講演会を開催。身近にある放射線や内部被ばくと外部被曝の違いなど。食品への注意点を伝えた。
【北の大地に行こう/小田原花火大会参加】企画のサポート	夏・冬の宿泊行事「北の大地に会いに行こう：夏」では、北海道芦別市の星槎国際高等学校本部校に29名の生徒児童と2名の引率保護者が参加。こども達から「さくらんぼ狩りが楽しかった。」「キャンドルアートがワクワクした。」などの声が上がった。8月に実施した小田原花火鑑賞ツアーでは3家族8名が参加。「北の大地に会いに行こう：冬」は北海道芦別市、帯広市で実施。児童40名が参加。 「北の大地に行こう」は次年度以降も継続

《2013年》

前年からの継続事業サポートの実施、要請により対応

2. 星槎寮を利用した方（団体）からの声

Q：どのような活動で、星槎寮を利用しましたか。

- ・被災者の健康診断や保健医療分野での支援活動の拠点
- ・支援活動の情報共有や活動方針の議論と決定
- ・相馬市および周辺市町村の健診、医療支援活動のため宿白
- ・相馬市主催の仮設住宅での寺子屋事業
- ・主に相馬高校に対する教育支援。
- ・新地高校のカウンセラー受け入れの講師の宿泊
- ・南相馬市立総合病院との共同研究お手伝い
- ・医科研の健康相談会、玉野地区の相談会など



3階部全フロアー星槎寮
(福島県相馬市さくらビル)

3. 星槎寮を利用した団体の活動効果・ご感想等（アンケート結果より）

【効果】

- ・効率的なプロジェクト運営
- ・費用削減
- ・支援者の身体的、精神的なサポートの提供
- ・様々な関係者との連携の促進
- ・結果として、^{ひえきしゃ}裨益者（助けとなる人、役に立つ人）への最大限のインパクト
- ・効率的な支援活動

【ご感想等】

- ・仕事との調整の都合で、支援活動の日程がぎりぎりになり、多人数での宿泊を必要とすることが多かったが、ほぼ毎回宿泊させていただき、ホテルを抑える心配等が全くなかった。

また、食堂がサロンのようになり、そこで知り合った方との思わぬ連携が生まれた。一般のホテルに個別に宿泊していたのでは不可能であった。

- ・とくに相馬市に宿がとりにくかったときは、この寮がなければ、そもそも支援活動を行うことができなかった。
- ・他団体の支援者との交流ができたことにより、いろいろな面で情報交換ができ、今後の被災地における活動に幅が持てた。
- ・活動の拠点として、宿泊場所を確保できるだけでなく、寮で様々な方と交流することにより、情報交換をスムーズに行うことができた。また、お風呂や洗濯・食事など、通常の宿泊先では制約があって不自由であるが、活動の都合に合わせて行うことができた。
- ・多くの方々と一緒に生活し、知り合い、情報交換が出来ました。私にとっては、仕事から疲れて帰ってきて、一緒に温泉に行き、ご飯を食べ、話をして、また頑張ろうという気持ちにさせてもらう、相馬での自宅です。我々の相馬での活動を続けるにあたり必須の場所です。

また、多くの方々に実際に現地を見ていただくために、現地にお連れした際の宿泊施設として利用させていただくことも多いです。

- ・支援者同士、地元の教員の方々（高村先生チームなど）、夜時間を気にせず和気あいあいと話し合った。情報交換ができ、新たなプロジェクトにつながるが多かった。連携がとれた中での支援活動につながったと思う。
- ・星槎寮が存在しなければ、これだけ多くの支援者の連携による効果的かつ効率的な活動は不可能であったと思われる。
- ・星槎寮の管理をしてくださる星槎の皆様がとても行き届いたケアをしてくださるために、いつ行ってもお部屋は綺麗に保たれ、布団やシーツはいつもきちんと洗濯してあり、朝食まで作ってくださる為、気持ちよく過ごすことができた。また、数日行くだけでは分からないような地元の地理や人についても伺うことができ、行動する際に大変参考になります。
- ・この星槎寮がなければ、今までの活動を続けてくることはできませんでした。
- ・星槎グループの皆様が筋を通しクオリティの高いお仕事をされるのが、勉強になった。
- ・星槎寮が清潔で楽しい雰囲気、私もそうだが、誰でも寮に行くのが楽しみになり、多くの人が集まる。そして、一度行けば何度も足を運ぶようになる。それが支援者同士の連携と交流の醸成に不可欠だったと思われる。星槎寮がなかったら無理だった。

